

## 理事長としての増田四郎先生

——ヴェーバーとの対応——

中村貞二

学校法人東京経済大学理事長の職を、増田先生は一九七九年（昭和四四年）四月から一九九三年（平成五年）六月まで務められた。八四歳の高齢に達せられるまでの十四年余り、これはまことに驚くべきことと言わねばならない。ひらの理事職に就かれたのが一九七一年（昭和四六年）一月であるから、そこから数えれば東経大で先生が就かれた法人役職は、実に二二年五か月に及ぶ。研究と教育の機関としての大学の役職を、かくも長年月のあいだ黙々と続けられたその秘密はなにか。

東経大の歴史を通してみると、先生が理事長を務められた期間、ことに最後の五、六年は、大学運営上もつとも困難な時期のひとつに数えられよう。いかにも表面だけを見るなら、増田理事長のもとで校舎は次つぎに建てられ、校地は整備され、他方では国内外の貴重文庫が購入されるなど、東経大の体裁は目に見えて立派になっていったのだが、しかし将来の教学の設計図をどう描くかという段になると、教授会内部の意見が一向にまとまらず、無理をした挙げ句の教授会案は、今度は先生をはじめ理事会側の想定をはるかに越えるといった具合だったのである。教授会と理事会、この両者のあい

だの意思疎通は途切れて、大学自治の観点から先生には頭の痛い日々がさぞ多かつたであろうと推察される。にもかかわらず先生は、理事長職を放り出されなかった。なぜだろうか。そこに私どもはこの仕事に寄せる先生に固有のもの、内面の意味といったものを読みとらねばならぬのではないか。だが内面の意味といっても、ストリートにはなかなか答が出しにくい。それは断念して、寄り道や回り道をしながらなら、なんとか答えが出せるかもしれない。

先生の生誕百年記念の催しを知らされたとき、私にはまず、同じく生誕百年が記念されたマックス・ヴェーバーのことが連想された。彼こそは、学問の入り口にあった増田先生を魅了して、西洋中世都市の研究へと誘った人ではなかったか。歴史認識にかかわる彼の卓抜な警句もまた、先生のもつとも「好きな言葉」だったではないか。役職者としての先生の内面の意味を迂回的に掴まえる場合にも、ヴェーバーとの対応関係を探ることが有効ではあるまいか、このように私には思われたのである。

さて前言のとおり、ヴェーバーが生まれて百年ののち、一九六四

年のドイツでは、記念の催しが二つ持たれた。一つはハイデルベルクで、いま一つはミュンヘンで。後者ミュンヘン大学主催のほうは、前者に比べて地味ではあったが、カール・レーヴェンシュタインがヴェーバーの思い出の数かずを、印象ぶかく披露しているのが目を惹く。彼はミュンヘンの著名な弁護士、ナチス政権下アメリカに亡命してアマスト大学の法学教授を務めた人。亡命のトーマス・マンともそのスイス時代から親交があった。このレーヴェンシュタインにとってマックス・ヴェーバーは、もともと全く未知の人であったのだが、一九一二年彼二十歳のとき偶然の機会に引き合わされて以後というものが、完全にその虜となり、一九二〇年六月四日、死の床の師匠を訪れて最期のときを見届けるまで、文字どおりヴェーバーに親炙した人のようである。その人の証言によれば、マックス・ヴェーバーが若い者に向かって始終口にしていた「三つの格率」というものがあり、これはまさにヴェーバーの遺言であると言ふ。記念講話の中から引用してみよう。

「マックス・ヴェーバーがわれわれに遺した三つの格率、とりわけ若い人たちにとくと考えてもらいたい三つの格率とは次のとおりです。

一、《厚い板に孔をあけること》(Dicke Bretter bohren) — 薄い板に孔をあけるのなら誰だつてできます。しかし何ほどか志のある人なら厚く固い板をうがつものです。

一、《日々の務めを果たすこと》(Die Pflicht des Alltags tun können) — 興味をそそる刺激的なことをするのはたやすい。しかし一人びとりに課されている日々の務めの煩わしさを少し

も厭わぬ、これほど難しいことはありません。

一、《沈黙を守ること》(Schweigen können) — 皆さん、これはマックス・ヴェーバー自身のもっとも苦手としたところです。彼は黙つていことができませんでした。私がおそばに侍つていた八年間、ヴェーバーはずつと学問上の、また政治上の争いの渦中にありました。争いは彼によって情容赦なく決着がつけられました。しばしばやりすぎでありましたが。……」

学生相手になされたヴェーバー最晩年の二つの有名な講演の中に、これら三つの格率が織り込まれていることは、すこし目をこらせば容易に見つかるであろう。しかし改めて考えてみたい。とくに第二と第三の格率の意味するものはなにか。これを解くことが役職者としての増田先生に近づく作業とならないだろうか。

まず第二の格率を取り上げてみよう。(第三の格率についてのレーヴェンシュタインの注釈は的はずれの冗談と思われるが、第二のそれについて言うところは、なかなか示唆的である。)ここで「日々の務め」とは、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のキーワード「日の要求」(die Forderung des Tages)に由来するものであることは疑いを容れない。森鴎外はこの語をめぐって「見果てぬ夢」を逐う、『妄想』というエッセイを残した。ゲーテの訓えは、五十歳を目前にした鴎外の腑に、ストンとは落ちかねたようである。

「奈何にして人は己を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらん。されど行為を以てしては或は能くせむ。汝の義務を果さんと試みよ。やがて汝の価値を知らむ。汝の義務

とは何ぞ。日の要求なり。これはゲョエテの詞である。……日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事実を蔑にする反対である。……日の要求に応じて能事畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不平家である。……」

鵬外の不平不満は、日頃の仕事に精を出して、いま陸軍軍医総監・陸軍省医務局長の地位にある自分というものは自分本来の姿ではない、ひよつとすると創作ひとすじの生き方もありえたのではないか、官吏と作家の二足のわらじを履かずにすまずともできたのではないか、などの漠たる想念に発していよう。とするならばこんな推測が成り立つ。『妄想』の鵬外においては、「日の要求」は、できればやらずにすませたいといった、否定的なニュアンスのものであったのではあるまいか。

これに対して、『職業としての学問』でヴェーバーが、敗戦と革命の大波に翻弄される学生たちに向かつて、「それぞれの持ち場に帰って『日の要求』にきちんと応えよう」と呼びかけるとき、「日の要求」は、鵬外の場合とは逆に、もつと肯定的・積極的な意味に解されていることは確実である。理事長という仕事、その「日の要求」に寄せる増田先生の想いもまた、ゲーテ＝ヴェーバーと規を一にしているのではないだろうか。

もうひとつ、トーマス・マンの例を見ておこう。これはたんなる思いつきではない。マンを持ち出したのは、小論の範囲でもいろいろと接点の多い人だからである。先達ゲーテは論外のこととして、

自家の年代記『ブッデンブローク家の人びと』は、著者の自負に見られるとおり、ヴェーバーやトレルチのプロテスタンティズム研究を出し抜いた小説であり、社会科学の文芸上の映し絵であると言つてよい。そうしてこの文豪の生まれ育ったハンザ都市リューベックは、増田先生の歴史研究の原点となった町なのである。

いまトーマス・マンの日常生活をその日記からのぞいて見ると、この人がゲーテの生活スタイルを指して「時間の聖化」と呼んだとおりのこと、つまり「勤勉と継続」の毎日が、直ちに見てとれる。旅先であろうと亡命先であろうと、几帳面そのものの一日は、執筆用にきつちりと充てられた午前の三時間から始まる。午後は、散歩に出たり新聞に目を通したり著述の下準備をしたりする他には、さまざまな雑用のための時間に充てられている。例えば校正刷に目を通す、書店宛ての通信文を書く、山のような来信への返事を口述する、等々、作家としては煩わしく厭わしいはずの仕事である。注目すべきは、これらの雑用を一括して、彼は「日の要求」を名付けていたらしいのだ。雑用の片付けにも、禁欲的な職業倫理の実践を思わせるものがある。生活のための必要悪などとして済まされるような事柄ではない。トーマス・マンは、問われればゲーテに倣って、これも天与の仕事の一部と答えたに相違あるまい。

思うに大学教員に課せられる研究と教育以外の公務としての役割は、そうした雑用に類するものではないだろうか。役職がそのまま本務とは言えないが、本務にかかわる雑務であり、そうした雑務をないがしろにせず日々これをこなすことができなければ、大学教員としての市民的義務を果たしたことはないだろう。官吏とし

の鵬外は、この種の「日の要求」を義務として果たしたそのうえで、なおあの妄想にとりつかれるところがあつた。増田先生はマックス・ヴェーバーやトーマス・マンと同じく、鵬外的な妄想から遠いところで、雑務をも市民的な職業義務と受けとめ、十四年ものあいだ「日々の務め」を果たしてゆかれたのだと思う。しかし雑務と本務とは、先生のばあい内面的にどう結びつくのであろうか。理事長という職務遂行の積極的な意味を、先生はどこに見いだされたのだろうか。

校舎を建てたり校地を整備したりするだけが理事長の仕事ではあるまい。それとともに、いやそれ以上に、研究者・教育者の立場から次の世代の者に問いかけ訴えること、そうしたソフトの仕事に先生の本領は発揮された。このように言うばあい私の念頭には、とりわけ卒業式での理事長挨拶がある。

まず挨拶のスタイルである。それは壇上からの気楽な訓示ではなく、学窓から実社会へと巣立つてゆく若者たちへの、まさしく訴えと言ふべきものであつた。先生はこれを、「説教ではなくお願い」と断られるのが常であつた。これを訴えと言つても、それは絶叫型の、あるいは煽動家ふうのものではないのだから、もっと適切な語があるかもしれないが、あの温谷の下の素顔は、真剣そのものであつた。なぜなら先生の挨拶の基調は、激変する世界情勢を前にしての危惧の念で満たされていたからである。文字どおり瞬く間にわれわれを包み込んでしまう国際化と情報化、いやまさりの機械的合理化と画一化、さては急激な都市化と過疎化、世界がかつて経験したことのないこうした時代の急流と激浪にもまれて、人間はいった

いどうなるのか、どのような心構えが必要となるのか、そして学問と大学は、等々、そんなことは老人の取越し苦労だと嗤えるだろうか。聴衆はみな、学生も教員も職員も、先生の問いかけを己れのこととして耳を傾けたはずである。

では先生のお願いの中身はどんなものであつたか。時に応じて力点の差や表現に異なることはあつたにせよ、基本的な趣旨は十四年のあいだ一貫して変わるところがなかった。いまこれをヴェーバーの「遺言」になぞらえて、三つの格率にまとめてみるとうこうである。

- 一、強靱な精神の持ち主であること。
- 一、協調を重んじ独善に陥らぬこと。
- 一、学び続けること。

これは、歴史家増田先生のいわゆる「相互依存と相互理解」の現代哲学を言い換えたもので、こう言つてしまえば何の変哲もないが、先生の警世の、そして経世の風格をよく示すものではないだろうか。

増田先生を目指しての寄り道の記録を、この辺りでひとまず締め括りたい。

本務と雑務の境界がぼかされたり取り払われたりするのは、義務の觀念の働きによる。「義務とは何ぞ。日の要求なり。」日の要求は人びとを駆つて行為へと向かわせる。だがその背後には超個人的な「時代」(Zeit) というものがある。平生は識閥下にある「時代」が自覚されるとき、ひとは「日と刻」(Tag und Stunde) の要求を凌駕する時代の要求もしくは時代の促しについて語るることができる。彼の行為はそのとき「時代への奉仕」(Zeitdienst) の形をとる。ト

ーマス・マンが第一次大戦のさなか、執筆中の『魔の山』を中断し、挙げて『非政治的人間の考察』に向かったとき、彼は敢えてこの苦行に赴く自分のことを、「召集」を受けたようなものと言いつ、しかも召集令状を發したのは、軍や国家に非ずして「時代そのもの」と書いたのである。「日と刻」の「時間の聖化」作業は、いまや「時代への奉仕」の性格を帯びる。——なにもマンに限ったことではない。おなじ大戦中のヴェーバーの数ある時論も、またさらに現代の諸問題に觸発された増田理事長の挨拶も、すべてこの意味の「時代への奉仕」と解されねばならない。

最後に増田先生の「奉仕」の仕方について一言しておくならば、「お願い」の形の理事長挨拶は、大学教授の「職業病」(ヴェーバー)と揶揄された「教授預言」すなわち自己顕示ではなく、「自己制御」(ヴェーバー)あるいは「自己限定」(ゲート)だったことである。「沈黙を守る」というヴェーバーのあの第三の格率も、教授預言はこれを断念する、という文脈に生かされねばならないと、私には思われる。

### 〔あとがき〕

本稿は、もと増田四郎先生の生誕百年を記念する「講演と語らいの集い」(二〇〇八年一〇月四日、如水会館)のために用意したノートに、全面的に手を入れたものである。本文への注記は避けたが、小論のための最も基礎的な文献は、東経大での先生の理事長挨拶を別にすれば、次のとおり。

Max Weber, Die protestantische Ethik und der "Geist" des

Kapitalismus. 1905

Max Weber, Wissenschaft als Beruf. 1919

Max Weber, Politik als Beruf. 1919

Karl Löwenstein, Persönliche Erinnerungen an Max Weber.

1964

Thomas Mann, Buddenbrooks. Verfall einer Familie. 1901

Thomas Mann, Betrachtungen eines Unpolitischen. 1918

Thomas Mann, Goethe als Repräsentant des bürgerlichen

Zeitalters. 1932

Albert Bielschowsky, Goethe. Sein Leben und seine Werke.

Neubearbeitet von Walther Linden. 2 Bde., 1928 (1. Aufl. 2

Bde., 1896—1903)

森鷗外、妄想、明治四四年(一九一一年)

(二〇〇九年一月)